

# 十和田市立 新渡戸記念館だより



昭和8年(1933)最後の墓参りに三本木を訪れた時の新渡戸稲造。祖父傳の墓・太素塚の側で。



『一日一言』新渡戸稲造著 (昭和8年出版) 「恩師新渡戸先生 追悼記念 弥七」のサインが見えます。

新渡戸稲造がカナダのバンクーバーで亡くなった昭和8年に出版の著書。初版は大正4年(1915)。版を重ねて昭和8年には第94版にもなっています。

## 不思議!! 杵家弥七のサイン入り『一日一言』 偶然にゆかりの地へ

昨年12月末、新渡戸館長が新渡戸稲造博士の著書『一日一言』を古書販売店から購入したところ、本の表紙裏側に「恩師新渡戸先生追悼記念 弥七」のサインを発見しました。これは稲造博士との交流が深く、当地にも来た事がある三味線家元・杵家弥七(きねいえやしち/「三味線文化譜」の創始者)のサインと思われる。

### 杵家弥七と新渡戸稲造

明治・大正期、三味線は酒の席で芸者衆などが弾く特殊なものと考えられていて、現在のように広く一般の人が習うまでにはなっていませんでした。特に西洋の楽譜のように音の調子をはっきり表したものが無い事が、普及しなかった一つの原因だった様です。そこで三味線の曲を五線譜で表し、誰でも気軽に三味線を始められるようにしようと考えたのが杵家弥七(本名・赤星よう)でした。稲造博士は跡見女学校での講演会の折りに、ピアノと長唄を組み合わせた杵家一門の斬新な演奏に感心し三味線の楽譜・「三味線文化譜」作りにも様々援助をするようになりました。そのため弥七は稲造博士を師とも父とも仰ぎ、博士が亡くなった後に出された『新渡戸博士追憶集』には佐藤昌介・宮部金吾博士などと共に稲造博士への思いを11首の歌にして記しています。また、昭和10年頃、現・十和田市で「新渡戸博士思ひ出の会」を開いた時も当地を訪れ三味線を演奏しました。ですからこの『一日一言』の発見には不思議な縁を感じます。



「新渡戸博士思ひ出の会」の記念写真。杵家弥七は前列中央。真後ろが夫の赤星氏。

### 弥七がおくった花立て

『新渡戸博士追憶集』のなかの“小伝”で稲造博士の生涯の親友だった宮部金吾博士が書いていますが「稲造博士の遺髪は祖父・太素翁の眠る太素塚に分葬されました」。当時木製の墓碑だけだったのが、三本木新渡戸家、太田家をはじめとして稲造夫人の実家エルキントン家等からの寄進を受け、現在のりっぱな墓所となりました。杵家弥七からも花立てが寄進されています。表に新渡戸家の家紋をあしらった一對の花立ての側面にはそれぞれ、弥七が『追憶集』に書いた歌の中から文化譜の発展を歌ったものと、亡き稲造博士への思いを歌ったものを一首づつ刻ませています。



墓石は新渡戸家と太田家香炉は佐藤法亮尼、花立ては杵家弥七より寄進。



左の花立ての歌「父と仰ぎ母と慕ひし師は逝きぬ我が生ひたちを誰に見せばや」。右には「みめぐみに生まれ出でにし道しるべ学びやすきよ糸竹の園」とある。

### 杵家弥七 (1890~1942)

長唄三味線方、杵家(きねいえ)家家元。本名・赤星よう。大正時代三味線楽曲の楽譜化を志し「三味線文化譜」を完成。これを出版して東京赤坂に三味線塾「杵家弥七女塾」を開設。文化譜の普及に力を尽くし長唄の発展に貢献した。昭和5年頃杵座(きねや)を杵家と改めている。



太素顕彰会評議員  
十和田市農協代表理事事務 程川 節男

農業を取り巻く情勢は厳しさを増していますが、先般全国農業新聞一農を歩くで「いまも新鮮な稲造の貴農論」が取り上げられました。著書『農業本論』には「如何なる国といえども其食物を他国に仰ぐ間は、その価値に如何なる変動を起こすやも計り難きを以て、全く独立と称することを得ず」とありますが今から百年前に書かれたとは思えぬ慧眼と感心します。農業を貴いものとして食する人が農業に感謝をもつべきと説かれた稲造博士の心の源は新渡戸三代の心に一致すると感じてなりません。恵み豊かな稲生川の流れに改めて感謝の気持ちが湧いて参ります。



太素顕彰会評議員  
上十農業共済組合組合長理事 佐々木 登

平成7年の合併から、組合の活動も十和田市のみにとどまらずより広い地域を対象とするものとなり、市町村の枠をこえた地域の精神的、文化的繋がりの重要性を感じております。そのような広域文化の要となる「道の駅」を十和田市につくる構想があるという事を耳にしましたが、上十三地区に広く水の恵みを与える稲生川とその建設に心血を注いだ新渡戸三代に注目するならば、人々の心を地域を越えて繋ぐことも出来るのではと思います。今こそ新渡戸記念館に保存されている貴重な資料に着眼し、地域の精神的シンボルとして活用されるよう願っております。

### 青森県史編さん室 ☆ 当館資料の調査を実施

平成8年から『青森県史』全50巻（平成23年度完成予定）の編さんが始まりました。新渡戸館長は近世部会の調査研究員となり調査活動に参加していますが、今年2月8・9日に当館資料の調査が行われました。また同時に、2月26・27日には当館資料との関連で盛岡市中央公民館の資料室へ調査に行きましが、この調査から当館資料の重要性が再確認されました。

### ★当館資料の調査

今年2月に、青森県史編さん室近世部会の部会長・長谷川成一弘前大学教授をはじめ、近世部会専門委員、事務局合わせて11名の方が調査のため来館しました。一階の展示資料については当館で仮目録を作成して、それをもとに二日にわたって調査が行われました。今回の調査は、所蔵資料の中の「青森県史」をまとめる上で必要な資料を中心に行われ、特に重要と思われる51点についてマイクロフィルムへの撮影が行われました。絵図面資料は、時間の都合上次回に調査を行うこととなりましたので、今後も積極的に県史の編さんに協力していきたいと考えております。



当館の資料を調査する県史編さん室の皆さん

### ★盛岡市中央公民館での調査

盛岡市中央公民館では南部藩の文書の多くを所蔵しています。そのため、三本木原開拓当時に南部藩に提出した資料も、盛岡市中央公民館に所蔵されています。そこで県史編さん室では当館資料との関係から、あわせて盛岡市中央公民館での調査も行いました。中央公民館での調査には新渡戸館長と江渡主任が同行し、当館所蔵資料と対応する資料16点を見せて頂きました。これまで、当館で所蔵している「新田開発議定帳」（三本木原開拓への出資者の名前や出資金などの取り決めが書かれた契約書）は南部藩に提出した文書の副本（控え）で、中央公民館に正本が残っていると考えていました。しかし、今回の調査で当館にあるものが原本還付された正本で、公民館には控えが残っているということがわかりました。

平成9年1月の記念館ニュースより

## 新渡戸記念館・この一年 -1996年をふりかえって-

今年1月の新渡戸記念館ニュースでは昨年1年間に記念館で行った活動や主な関連情報についてまとめて紹介しました。

平成9年1月の記念館ニュースパネル→



3月の新渡戸記念館ニュース  
 古文書の世界Ⅲ 「太素日誌」から  
 ◆◆新渡戸傳、大商人への第一歩◆◆

### 十和田山材木の伐り出し

新渡戸傳は「三本木原開拓の祖」として知られていますが27歳からの17年間は商人となっていました。父・維民が藩の政策に反対し北郡川内村(現・下北郡川内町)に流され、家計を助けるため傳が商人となったのですが意外な商才を発揮して大きな利益を上げました。中でも文政12年(1829・傳36歳)江戸大火の時に十和田山(十和田湖周辺の山)から材木を伐り出し江戸で売った事は傳にとって大商人への足がかりとなりました。

#### 【文政7年(1824)十和田山の材木伐り出しを考える】

始めは一つ一銭の小間物の行商をしていた傳でしたが川内の材木商・仙台屋初五郎(=藤田三左エ門)の手伝いをする中で徐々に下北などの檜材を仕入れ江戸で売る商いもするようになりました。その後下北の檜材の価格下落をきっかけに、下北の材木商3人と江戸材木商・天満屋と傳の五人で共同出資し新たに十和田湖周辺の山から桂や槻を伐採し船で江戸に運び売る事を考えました。

#### 【文政8年(1825)神秘の十和田湖を輸送ルートに】



「南部領地図」部分(江戸末期) 当時信仰の場だった十和田湖を物資輸送ルートに活用。

十和田山で伐採を行う間、山で働く柚(木こりの事)たちの食料などは十和田湖南側の鹿角郡毛馬内で調達し米代川の支流から運ぶようにしました。当時、十和田湖では七つの言葉(蛇、赤、丹砂、柴、八、長い、舟)を忌言葉として使用が厳しく禁止されていました。舟については、十和田湖に浮かべる事も禁止し、例外的に丸木をくりぬいた小舟を木櫃と呼んで使っていました。傳は神に祭文を捧げて、ある程度の大きさの船を十和田湖で使用し、忌言葉も自由に使い効率よく仕事が行えるようにしました。こんな現実主義が商人として成功する大切な要素かも知れません。

#### 【文政9年(1826)材木の流し方を自ら学び柚に教える】

十和田山から切り出した材木は、奥入瀬川の上流から河口まで流す予定でした。しかし、材木の川流しをするには難しい場所がいくつかありました。この事を江戸の

天満屋に相談したところ江戸の川流しの職人をさらに雇う事を勧められます。傳は、それなら自ら川流しの方法を職人から学び、それを柚たちに教えてやらせようと考えました。そのために遠州・駿州(静岡県)や信州(長野県)の山まで赴き「本角取り」(製材方法)や「川流し瀬切り法」(小材を使い川をせき止め流れをコントロールする方法)「挟手(棧手の事か)の仕掛け組み方」(丸太を梯子状に組み細い柴を編みつけたもの=棧手を使って水が少ない所で材木を動かす方法)の三つを学びました。フットワークの良さで無駄な出費を省く傳のやり方が成功につながったのでしょう。



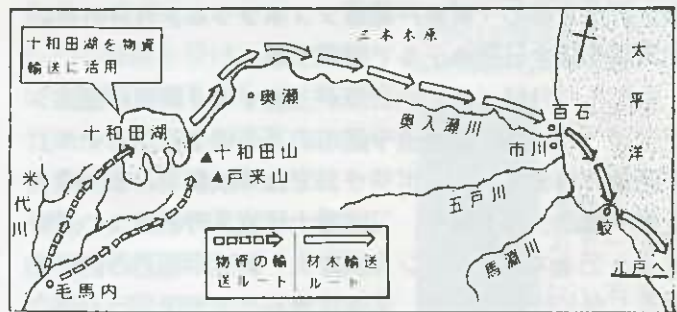
山ろくろ  
 『太素日誌』には「山ろくろ」も用意させたとありますので、左図の様な方法での伐り出しが行われたと思われます。

↑『山瀨村生活史事典』(柏書房)より

※材木の伐り出し方法について、小川原湖民俗博物館の桜庭館長から資料を提供して頂きました。

#### 【文政10年(1827)十和田山の材木が八戸の港に到着】

傳は、奥入瀬川の上流に三か所堤をつくって十和田湖の水を半年以上せき止め、奥入瀬川の水量を90センチ程に増して材木を太平洋岸まで流しました。材木が流れにくい場所では傳が川流し職人から習ってきた方法を使い奥入瀬川河口の市川浦(現在の八戸市市川と上北郡百石町にまたがる海岸)に材木がついたのは川流しを始めてから5か月後でした。流れ着いた材木は八戸の岐まで運びそこから船積みして江戸へ輸送しました。



文政10年から三年間毎年8月に十和田山からの材木約4千本が八戸に流れ着きました。3年間に伐り出した材木は合計約1万4千本。大材では縦横約1メートル長さ七メートル半のものも。



三月の新渡戸記念館 ニュースパネル

— 関 連 情 報 —

●記念館だより第3号で紹介した稲造博士の書について  
木村県知事が十和田青年会議所新年祝賀会で話す

今年1月15日十和田市内で行われた十和田青年会議所の新年祝賀会に、来賓として出席した木村守男青森県知事は、祝辞の中で記念館だより第3号で紹介の新渡戸稲造の書「大海の深さを渡たる舟人はうち来る波に争はぬなり」を座右の銘として、県知事の執務室に掲げている



祝辞をのべる木村知事

事を語りました。当館にこの書のコピーを提供して下さった五十嵐明子さんと木村知事は小学校時代からの幼なじみという事です。

●国際政治学者・舛添要一氏来館

TVなどで有名な国際政治学者・舛添要一氏が3月13日田中建設企業グループの文化講演会に来市し、講演の前に当記念館に来館されました。ジュネーブの高等国際政治研究所の客員研究員として活躍されていた頃、稲造博士の足跡を研究されていたこともありジュネーブの国際連盟事務次長として活躍した稲造博士に思いを馳せながら、館内を興味深く見学されていました。



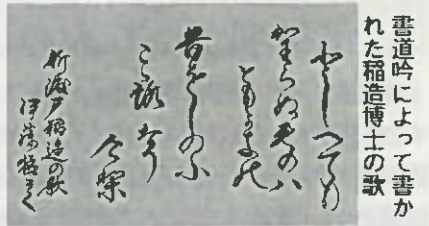
館内を見学する舛添要一氏

●全日空主催の「新渡戸稲造シンポジウム」5月31日に北海道千歳全日空ホテルで開催予定

今年5月31日(土)全日空が主催する「新渡戸稲造シンポジウム」が、北海道千歳市の「千歳全日空ホテル」で開催されます。シンポジウムでは「映像でみる国際人新渡戸稲造」の上映や、元国連大使波多野敬雄氏の講演パネルディスカッション「国際人・新渡戸稲造の世界を語る」など行われます。入場は無料ですが申し込みが必要です。〔4月30日(水)締め切り・申し込み多数の場合は抽選〕詳しくは「全日空・新渡戸稲造シンポジウム事務局」(TEL03-5300-2232)までお問い合わせ下さい。

●第2回南部と津軽のふれあいコンサートにて、稲造博士の歌を「書道吟」で上演

邦楽文化を通して南部と津軽の交流を目的とした「第2回南部と津軽のふれあいコンサート」が1月18日十和田商工会館大ホールで開催されました。その中で、青森市の伊藤香祥さん(詩吟)伊藤猛さん(書)により、稲造博士の歌「年経ても変わらぬものは友垣の昔をしのふ情なりけり」が書道吟として演じられました。この会は担当の原田圭二さんをはじめ多くの方々の努力により行われました。さらに発展し継続されることを願っております。



書道吟によって書かれた稲造博士の歌

その中で、青森市の伊藤香祥さん(詩吟)伊藤猛さん(書)により、稲造博士の歌「年経ても変わらぬものは友垣の昔をしのふ情なりけり」が書道吟として演じられました。この会は担当の原田圭二さんをはじめ多くの方々の努力により行われました。さらに発展し継続されることを願っております。

●平成8年度分の絵図面22枚裏打ち完了

今年度分の絵図面の裏打ち作業が、今年1月完了しました。今年度は22枚の絵図面が裏打ちされ、昨年11月にはその中から新しい発見が「東奥日報」に掲載されています。平成9年度の裏打ち作業でも、新しい発見が期待されます。

●国際興業グループ・秋北観光主催の観光ツアーで昨年11月から今年3月までに20団体来館

昨年11月から今年3月まで秋北観光主催の観光ツアー20団体が来館しています。当記念館には旧南部領の秋田鹿角の絵図も所蔵されており、鹿角周辺に住んでいる方など、興味ある方にお見せするサービスもしています。

— 活 動 報 告 —

●盛岡市中央公民館における青森県史編さん室の調査に新渡戸館長、江渡主任赴く

今年2月盛岡市中央公民館で当館の資料と関連のある資料について調査がおこなわれました。県史編さん室の瀧本壽史氏と新渡戸館長、江渡主任が調査に赴き、開拓当時新渡戸傳が南部藩に提出した文書や絵図面を中心に調べました。(詳細は2ページ)



新渡戸新田開設地図・新田上水口より矢神中概迄(盛岡市中央公民館蔵)

— 編 集 後 記 —

これまで外部にあまり出したことのない新渡戸家文書でしたが、江戸末期から明治初期にかけて激動の時代を証明する数々の資料が、豊富に保存されています。青森県史編さんには、充分協力したいと考えております。

発 行 十和田市立新渡戸記念館  
〒034 青森県十和田市東三番町24-1  
TEL (FAX) 0176-23-4430  
印 刷 有限会社 岩間印刷所